

あいち病害虫情報 最新情報

令和2年6月17日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

梅雨入りは平年より2日遅い

東海地方は6月10日ごろに梅雨入りしたと見られます。6月11日名古屋地方気象台発表の1か月予報によれば、向こう1か月の天候は、平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想されています。

いもち病（葉いもち）

BLASTAMを用いた葉いもち感染好適日の判定によれば、5月下旬以降、県内の複数地点で好適日となった日が既に7回ありました。好適日が2回以上となっている地点もあります。6月上旬に感染していた場合には、既にほ場での初発を確認できる時期です。葉いもちを対象とした育苗箱施薬をしていない場合は、葉いもちの早期発見、早期防除に心がけましょう。なお、本日発表の「いもち病（葉いもち）情報第1号」に葉いもち感染好適日の判定結果を掲載しましたので、参考にしてください。

イネ縞葉枯病

5月下旬に県内22地点のムギ類ほ場から採取したヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルスの保毒虫率は4.5%で平年並でした。ただし、西三河の一部地域では高い値となっています。「コシヒカリ」など本病に抵抗性がない品種では注意が必要です。詳細は、本日発表の「イネ縞葉枯病情報第1号」を参照してください。

ウンカの飛来状況

セジロウンカなどのウンカ類やコブノメイガは、梅雨前線の活動に伴い断続的に飛来します。ほ場の観察をしっかりと、発生状況の把握に努めてください。今後、飛来の状況をウンカ情報として適宜提供していきますので、防除の参考にしてください。

斑点米カメムシ類

予察灯においてミナミアオカメムシやカスミカメ類が捕獲されています。ミナミアオカメムシは、コムギ収穫後、タデ科雑草やネズミムギ（イタリアンライグラス）で生息しています。また、その他の斑点米カメムシ類は、畦畔、土手及び休耕田などで出穂したイネ科の雑草で繁殖します。ほ場周辺の除草を徹底し、繁殖を未然に防ぎましょう。

果樹の病害

梅雨に入りました。降雨による病気の伝染に注意しましょう。

ブドウべと病は、20～22℃が発芽適温なので、この時期の降雨で急激に発生が拡大します。発病部位は見つけ次第除去し、適切に処分するとともに速やかに防除しましょう。

ブドウ晩腐病の病原菌の胞子は、6月から7月に最も多く飛散するため、この時期に降雨が多いと発生が多くなります。昨年発生が多かったほ場では特に注意し、発病果房は見つけ次第除去するとともに、防除を実施しましょう。この時期（幼果期）に、2週間間隔で計2回防除すると効果的です。

ナシ黒星病は降雨により胞子が飛散し、発生が拡大します。幸水では、この時期から再び果実が本病に侵されやすくなります。昨年多発したほ場では特に注意し、防除を徹底しましょう。

モモせん孔細菌病は風を伴った雨で発生が拡大します。風当たりの強いほ場では特に注意しましょう。本病の伝染源は枝病斑です。見つけ次第除去しましょう。品種によっては収穫が始まるので、農薬の使用にあたっては収穫前日数や周囲への飛散に注意しましょう。

カキの角斑落葉病菌及び円星落葉病菌の胞子は、6月上旬から7月中旬に最も多く飛散し、感染します。予防に重点をおいて、防除を実施しましょう。

果樹カメムシ類に注意！

豊橋市に設置した予察灯において、ツヤアオカメムシの誘殺数が6月第2半旬から第3半旬にかけて急増しています。また、チャバネアオカメムシについても豊橋市に設置した予察灯、豊田市に設置しているフェロモントラップで、依然として多く誘殺されています。果樹カメムシ類の飛来を確認したら、防除を実施しましょう。詳しくは、5月28日発表の「令和2年度病害虫発生予察注意報第1号」を参照してください。

チャノキイロアザミウマの発生に注意！

6月上旬にブドウ周囲のイヌマキ（防風垣）でチャノキイロアザミウマ生息調査（10新梢の払い落とし虫数）を行った結果、過去10年で2番目に多い状況でした。

本種は軟弱な葉や新梢で増殖しますので、不要な枝は取り除くなどの栽培管理に注意しましょう。ウンシュウミカンでは、6月上旬から7月にかけて果梗部の被害が発生しやすくなります。ブドウでは、袋かけまでの防除を徹底しましょう。

本種の防除適期は成虫の発生ピークです。気温の高い日が続いたため発生ピーク予測日が前進しております。詳細な情報につきましては近日中に発表予定です。

ナシヒメシンクイ

フェロモントラップにおけるナシヒメシンクイの誘殺数はおおむね平年並です。今後は途切れなく発生し、世代数を重ねるほど虫の密度が高くなります。モモ、ナシでは果実が食害されますので、収穫前日数に注意して防除しましょう。

アブラナ科野菜のチョウ目害虫

キャベツなどのアブラナ科野菜の残渣は、秋冬作におけるコナガなどチョウ目害虫の発生源となります。収穫終了後は残渣を適切に処分しましょう。

ウイルス病の伝染源を減らしましょう！

施設トマト（促成・半促成栽培）の栽培が終了する時期です。タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病の病原ウイルス（TYLCV）、コナジラミ類はトマト黄化病（TOCV）を伝搬します。次作トマトが黄化葉巻病や黄化病に感染しないように、栽培終了後、施設を密閉してコナジラミ類を死滅させ、発病株は適切に処分しましょう。

施設キュウリでは、ミナミキイロアザミウマがキュウリ黄化えそ病の病原ウイルス（MYSV）を伝搬します。次作キュウリが黄化えそ病に感染しないよう、栽培終了後、施設を密閉してミナミキイロアザミウマを死滅させ、発病株は適切に処分しましょう。

イチゴのハダニ類

ハダニ類は乾燥条件を好みます。空梅雨の場合、好適な条件となるので、親株床での発生状況に注意し、防除を徹底しましょう。

キクの病害虫

白さび病は例年、梅雨期に感染が多くなります。発病が見られるほ場では、被害葉を切除して適切に処分するとともに、同一系統薬剤の連用を避けて防除しましょう。

予察灯、フェロモントラップなどの各種調査データは、ホームページ「あいち病害虫情報」（アドレス：<https://www.pref.aichi.jp/site/byogaichu/index.html>）を参照してください。

問合せ先 愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病害虫防除室
TEL 0561-62-0085 内線471 FAX 0561-63-7820